

市中病院における急性中耳炎の動向

木林 並樹 福島 邦博 假谷 伸
片岡 祐子 西崎 和則

岡山大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野

The Trend of Otitis Media in the Municipal Hospital

Namiki KIBAYASHI, Kunihiro FUKUSHIMA, Shinn KARIYA,

Yuko KATAOKA, Kazunori NISHIZAKI

Okayama University Medical School Department of Otolaryngology

In recent years, the clinical picture of acute otitis media is diversified, and it is said that the otitis media which resist to the treatment using antibiotics, and also which repeats symptoms also after abatement have increased. However, it is very difficult to grasp how many otitis media differing in the municipal hospital and a basic hospital was expected, and have actually made clinical pathema of such otitis media rebellious as an infectious disease in the city.

This time, we conducted positive investigation in cooperation with the municipal hospital in Okayama for one year using the questionnaire from April, H16. A questionnaire asks about the situation, living environment, complication, and the content of treatment of an acute-otitis-media patient, and the reply was brought from 19 institutions. Since the existence of that rebellious-izing and repeatability was especially examined about the trend of the acute otitis media in Okayama based on these results of an investigation this time, I will report.

近年、急性中耳炎の臨床像が多様化し、難治性・反復性の中耳炎が増加してきたといわれている。しかしながら、こうした中耳炎の臨床病態は市中病院と基幹病院とでは異なることが予想され、実際に市中感染症として、どの程度中耳炎が難治化しているのかを把握するため、今回我々はH16年4月より1年間、岡山県下の市中病院と協力し、アンケートを用いて調査を行った。この調査結果をもとに岡山県下の急性中耳炎の動向について、特にその難治化と反復性の有無について検

討したので報告する。

今回使用したアンケートを (Fig. 1) に示す。左半分は患者の生活環境、症状、合併症、中耳炎の状況を問うもので、右半分は行った治療につき先生方に記入していただく形式をとった。4病院、15診療所より回収できたアンケートは615枚、そのうち97%は市中の診療所からの回答であった。その年齢分布は (Table 1) であった。0歳～6歳の就学前の小児が89%と大半を占め、中でも1歳台をピークに生後6ヶ月～2歳の割合が55%と

中 耳 炎 問 診 票

最近、なかなか治りにくい中耳炎が増えていると言われています。
中耳炎の治療について考えるために、次の問診票にご記入下さい。

今日の日付 平成 年 月 日
 生年月日 平成 年 月 日
 年 齢 歳

• **今までの様子や環境をお聞かせします。**
 兄弟姉妹はいますか?はい . いいえ
 兄弟の中耳炎は?ある . ない
 幼稚園・保育園に通園していますか?はい . いいえ
 赤ちゃんの頃の栄養は?母乳 . 人工 . 混合
 「いかり泣き」をしますか?はい . いいえ

• **中耳炎以外の病気についてお聞かせします。**
 暗愚での治療を受けていますか?はい . いいえ
 風邪や副鼻腔炎など、鼻水が続いている状態ですか?はい . いいえ
 いつごろからですか? (日・週・ヶ月前から)
 アレルギー性鼻炎と言われたことはありますか?はい . いいえ
 その他何か病気を指摘されたことがありますか?
 ()

• **これまでの中耳炎の状態についてお聞かせします。**
 今度が初めての中耳炎ですか?はい . いいえ
 一番最近中耳炎になったのはいつですか?
 (1ヶ月以内・1~3ヶ月・3ヶ月~1年・1年以上前・不明)
 中耳炎にかかると思ひますか?
 いつも . たまに . いいえ . わからない

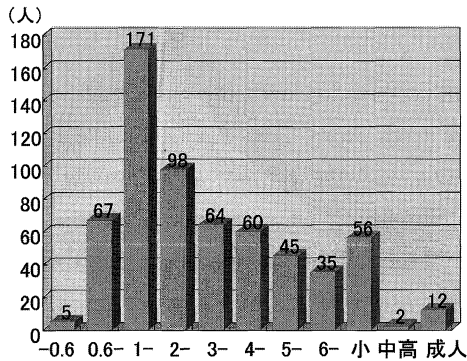
医療施設記入欄

施設名	
患者イニシャル	姓 _____ 名 _____
医療機関別 ID 番号	
治療内容	
鼓膜穿孔・切開	あり . なし
チューブ挿入	あり . なし
内服抗生剤	あり . なし
ありの場合その内容	
注射用薬剤の使用	あり . なし
ありの場合その内容	
入院での治療	あり . なし
今回の重複検査	
前回の報告書	提出済み . 未提出
反復する中耳炎ですか?	はい . いいえ
持続する中耳炎ですか?	はい . いいえ
今回治療後の指示	
1) 終了	
2) 継続	
3) 他院紹介 (病院名 科名)	
4) その他 ()	

2) この用紙は、「一つの中耳炎のエピソードにつき一枚」で記入してください。
Ver.2

Fig. 1 A questionnaire we used

Table 1 A composition of 615 patients



高かった。この615名を治療経過に対する先生方の印象別に分けてみたところ、反復するとの回答が全体の39%、持続するとの回答が22%、その両方の反復・持続するとの回答が16%、市中で治療にあたられている先生方は、急性中耳炎症例のうち、約半数に対し、反復・持続する、治療困難な中耳炎であるとの印象を持たれているということがわかった。(Table 2中央)

次にその反復性・持続性中耳炎群を、年齢別に検討してみると、0歳児が10%、1歳児が41%と最も多く、2歳児が17%で、0~2歳児が全体の

68%を占めていた。一般の中耳炎群における、0~2歳児の占める割合は45%でしたので、それと比べると、反復性・持続性中耳炎群では乳幼児の占める比率が高いことが分かる。(Table 2)

更に中耳炎が反復すると答えた群で、過去にどのような受診歴があるのかを見てみると、1ヶ月以内の反復が15%、3ヶ月までの反復が40%というデータが得られたが、反復するという前提からすると、これは若干低い結果のように思われた。そこで、次に寄せられた回答の中から、実際に類回受診をした症例をピックアップして、更にその状況を検討してみた。2回以上の受診をしたものが32症例、そのうち、3ヶ月以内の再診例が19症例、その受診状況は (Table 3) に示すが、1ヶ月以内の再診が22%、2ヶ月以内が16%、3ヶ月以内が22%、全体では3ヶ月以内に6割が再度、診察を受けているという結果であった。その19例に対し、処方された抗生剤の内訳は示すとおりで、主にセフェム系抗生剤の投与がなされているようであった。

次に環境因子の点から、一般の中耳炎群と、反復・持続する中耳炎群とを比較してみた。

Table 2 Intractable otitis media patients devived into age

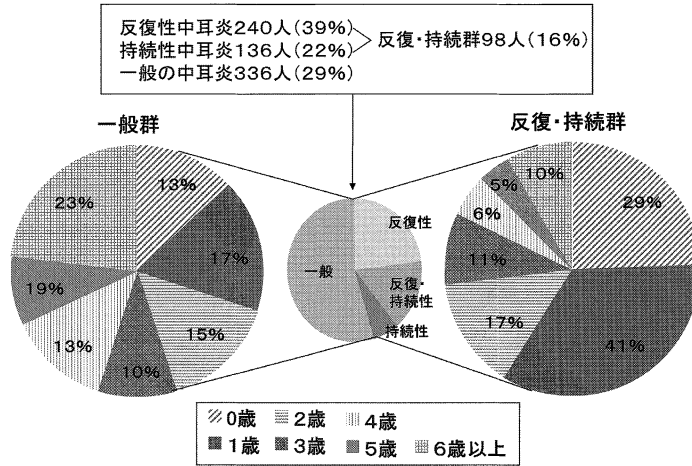


Table 3 Analysis of patients consulting frequently

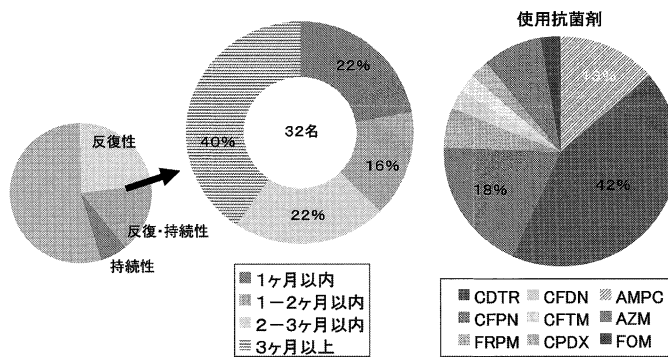
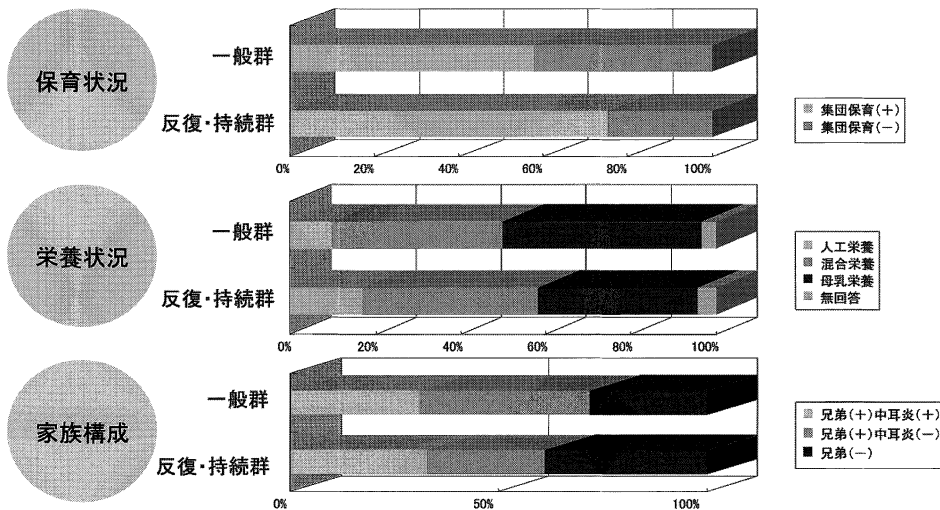


Table 4 Analysis from the point of living environment



よくいわれている，集団保育との関係だが，一般群の通園率が58%だったのに対し，反復・持続群では76%と有意な差を認めた．また，母乳栄養児に比べ，人工栄養児のほうが中耳炎にかかりやすいと言われる¹⁾が，今回の調査でも，そのような結果が出たように思う．家族構成の点では，兄弟がいて，しかもその兄弟に中耳炎がある場合，罹患率が高くなるといわれる²⁾が，今回もわずかではあるが，差が認められた．(Table 4)

続いて合併症の点から検討してみた．急性中耳炎は上気道感染をベースに発症するため，副鼻腔炎の有無は大きく影響すると考えられたが，今回の調査ではむしろ反復・持続群で低い割合となり，相関は得られなかった．他にも，喘息・アレルギー性鼻炎の合併の有無を調べたが，一般群に比べ，反復・持続群で効率であったものの，全体の合併率が低いため，やはり相関は得られなかった．

今回，我々はアンケートを用いて，岡山県下の市中病院における急性中耳炎の実態を調査した．反復あるいは持続する難治性の中耳炎が全体の5割弱を占めていた．全体に年少児，特に1歳台をピークに0～2歳児の占める割合が高く，反復・持続群では更に高かった．環境因子では集団生活の有無が影響していることが分かったが合併症からの検討では有意な相関を得ることは出来なかった．

参 考 文 献

- 1) 2) 山中昇：変貌する急性中耳炎 100-117, 128

連絡先：木林 並樹

〒700-8558

岡山県岡山市鹿田町2-5-1

岡山大学大学院医歯学総合研究科

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野

TEL 086-235-7307